家庭と学校をシームレスにつなぐ体育の学習評価に関する研究

－保護者のマルチステークホルダー・プロセスの参加に着目して－

石井幸司（東京学芸大学教職大学院）

１．目的

本研究の目的は、家庭と学校をつなぐ学習評価の機能について、保護者の体育に対する認識に基づいて明らかにすることである。

２．研究方法

本研究の目的に迫るために、個別的な場合から出発して一般的な命題を導くような推論方法である、帰納的アプローチを用いて、複数の具体的な事実を明らかにすることからある事実を導き出し、目的に迫りたいと考えた。

具体的には、保護者の体育に対する認識の実態と形成要因を検討し、現在の保護者の認識を把握するとともに、家庭と学校をシームレスにつなぐ学習評価の必要要件を見出し、評価実践へとつなげていく。さらに、明らかになった知見に基づいた学習評価の実践を通して、保護者の体育に対する認識がどう変容するか、体育に対する認識を支えている価値判断を伴う評価規準がどう変容するのかを明らかにする。

３．結果と考察

1)　小学校第５・６学年の子供をもつ保護者を対象に、異なる４地域で体育に対する認識について質問紙調査を行った。その結果、体育に好意的だった保護者ほど練習量志向があり、認知主義的学習観をもっていることや、保護者は体育の学習とは教師から与えられた課題ができるようになることが大切だと認識していることが明らかになった。

2)　1)の質問紙調査から明らかになった保護者の体育の認識を形成している要因について、修正版グラウンデッドセオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、保護者の体育に対する認識は、学生時代に受けてきた体育と、体育行事での相対的な技能への称賛と、体育や部活動での運動量志向の経験が土台となり、親となってからの子供への願いや子供との相互作用を通して形成されるプロセスであった。

一方で、保護者は子供の学習状況を把握していない実態が明らかになった。このことから、保護者の体育の認識を、学校体育で目指す子どもの姿と合致させるためには、保護者と子供の相互作用を前提とし、保護者が子供の体育の学習状況を適切に把握することが重要であることが示唆された。

3)　「メディアポートフォリオ」（鈴木, 2008）を用いて子供の学習成果を子供・保護者・教師間で長期的に共有し、保護者の体育に対する認識の変容を、二要因混合分散分析、テキストマイニング分析、記述内容の具体的事例を質的に分析した。その結果、保護者は、協調性を育んだり、技能が身に付いたりした「結果」に体育の価値を求めていた体育の認識から、思考力・判断力・表現力等や運動に主体的に取り組む態度にも着目するようになり、子供が豊かに関わり合いながら学ぶその「過程」に、体育の価値を求める認識へと変容したことが明らかになった。

4)　保護者が「メディアポートフォリオ」を通して長期的に学習評価に参加することで、体育の認識を支えている評価規準の変容プロセスについて複線径路・等至性アプローチを用いて分析した。その結果、保護者目線から幼少期の我が子からつくられたイメージや周りの子供と技能を比較していた相対評価から、子供自身の体育の学びの表情から子供の視点で学びを解釈する絶対評価に体育の評価規準が変容した。

４．結論

本研究では、以上の捉え方をもって、家庭と学校をシームレスにつなぐ学習評価は、保護者のマルチステークホルダー・プロセスへの学習評価の参加過程で体育に対する認識を変容させ、保護者自らの経験と「いまーここ」の子供との相互作用の葛藤の渦中での子供理解と、自己理解を通し、子供の学びを支える支援者として成長を促す機能を有していると結論付けられた。

５．主な参考文献

１）鈴木直樹（2008）　体育の学びを豊かにする「新しい学習評価」の考え方．大学教育出版.